

BOOK REVIEW

愛と支配の博物誌

イーファー・トゥアン 著 片岡しのぶ 金利光 訳 工作舎

残忍さという言葉は、あらゆる人間の性向の中でも、おそらく園芸家には最もにつかわしくない言葉でしょう。多くの人は庭づくりの中にやすらぎや癒しを求め、そのためにとにかくストレスの多い現実の社会生活からのアサイラムとしての役割を庭に期待しつづけてきました。癒しは植物や水や石、またそれらが構成する風景への愛着、愛情から生まれます。そして社会生活のなかで感じる他者の脅威や、自らの食欲さといった悪徳から逃れられるからこそ、庭はやすらぎの場でありつづけたのです。

ところが、そういった愛情は庭の中でのみ、つまり自然と人間が不平等な関係にある場合にのみ成立するもので、庭の外で人間が自然を征服するために発揮する力 パワー＝支配欲の残忍さと同じものがここにも働いている。愛情とはむしろその支配欲の残忍さを覆い隠す沈痛薬でしかなく、支配欲の対極にあるものではない、というテーゼがこの本のモチーフになっています。支配欲と愛情が結びついたところには「愛玩物ペット」がうまれます。犬や猫のみならず、家畜も、さらには人間さえも、そして庭や植物や噴水も、みな人間が自らの支配欲を満足させるために愛情をそそぐ対象である限りにおいて「愛玩物ペット」であると言えます。そして力 パワー＝支配欲を起点に造園術ランドスケープや噴水や植物を「愛玩物ペット」として眺める作者の視線は、トピアリーの是非や整形形式か非整形形式か、といったお馴染みの論争をアイロニカルに照らしだしていきます。

もっとも、アイロニカルなのは著者の側ではありません。読者である我々の常識がアイロニーを生んでしまうのです。例えば人工の植物について。私は以前ロンドン近郊のキュー・ガーデンを訪れたときに、ウィリアム・チェンバースのパゴダや熱帯植物研究の殿堂であるパームハウスをめぐるあと、小休憩に立ち寄った園内のレストランで、柱という柱に蔦が蔓をからませているのを見て、さすがはキュー・ガーデンだと感激したことがあります。ところが近づいてみると、それらはみなプラスチック製のつくりもので、レストランの建物の内側でまで植物が人間と共生していると見えたのは、それが周囲にとけこんでいるために私がつくりあげた幻想だったのです。その後、花に彩られたロンドンの街中を注意深く眺めてみると、特に室内では人工の植物が意外に幅をきかせていることに気がつきました。

トゥアンによると、これら人工の植物への指向も、実は植物を育てることには手をかけることを厭っているのではなく、枯れることのない永遠の生命を作りあげたい、という古くからの自然支配の欲求、いいかえれば「常春」という楽園をつくりあげる不可欠な要素の一つへの遡求であり、決して生きた花への愛情と対立するものではないのです。

例えば、開店したてのパチンコ屋の店先にならぶ人工の花輪を見るとき、我々は華やかさと頹廢の匂いが共存しているのを感じとることがありますが、これも楽園の必ずもっている要素の一つであることが思いおこされます。そういえば、労せずして生活の糧が手にはいるというのも楽園のもつ一つの美德だったといえ、できすぎた付会でしょうか。